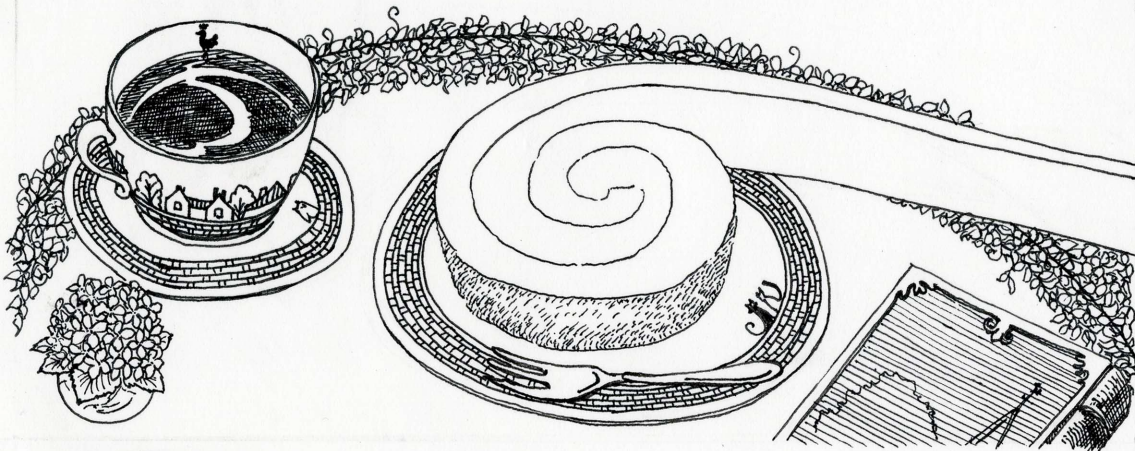
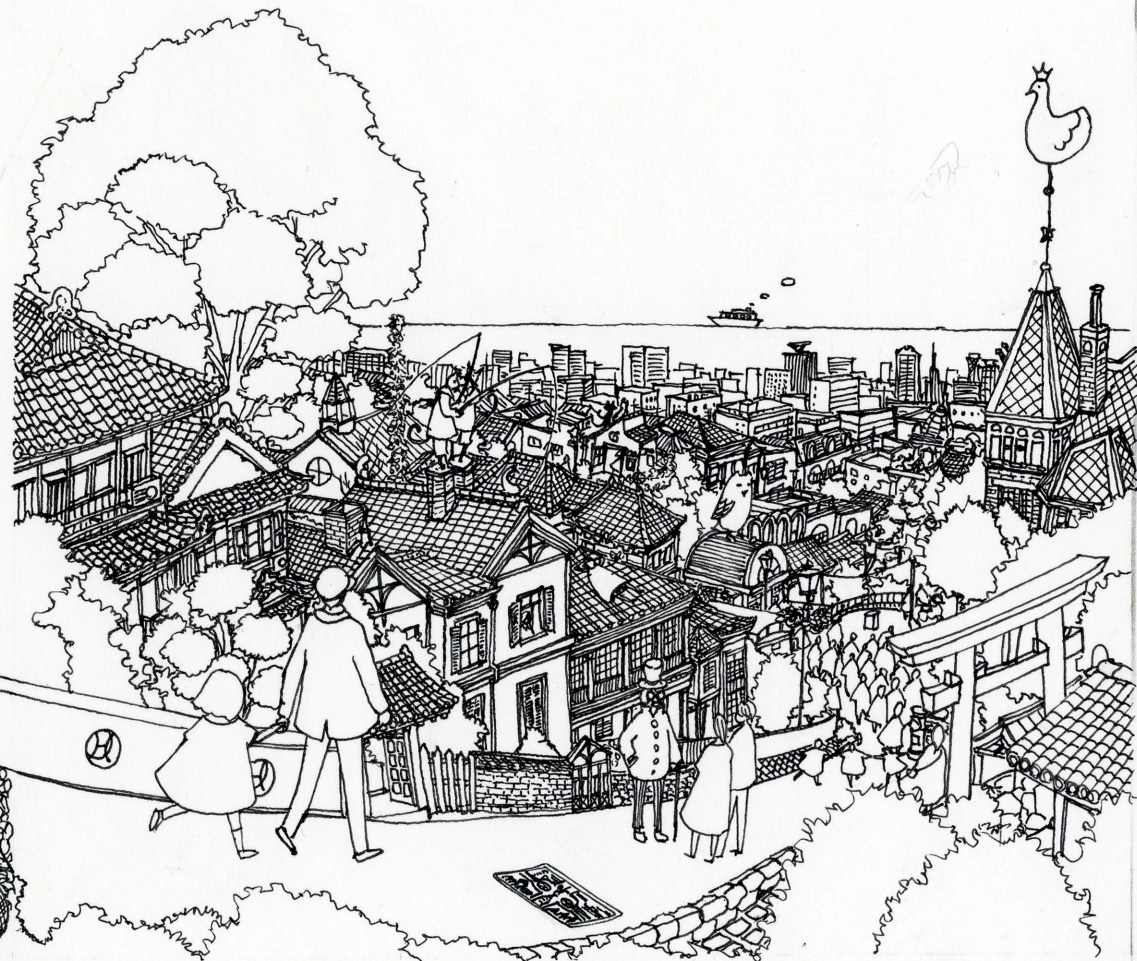
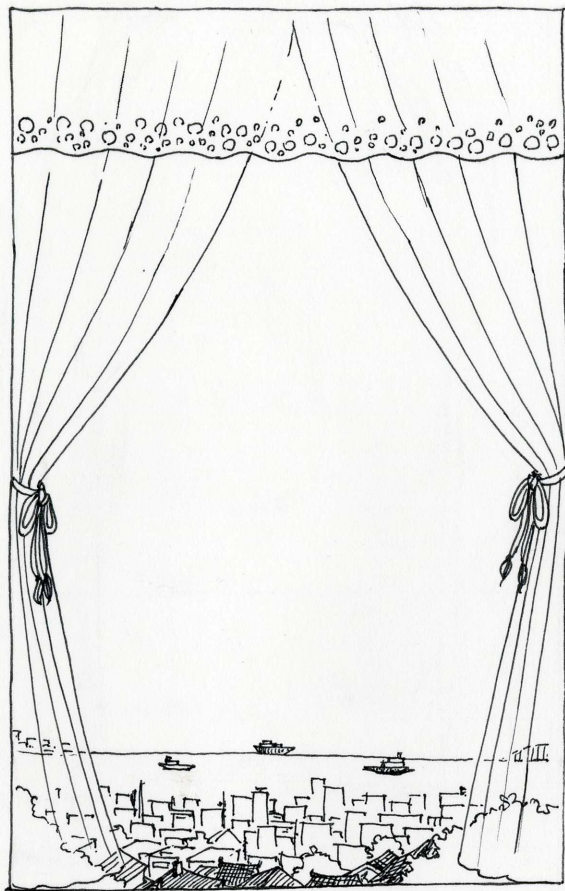


# KOBE KITA NOTE



いつものように

バスに揺<sup>ゆ</sup>られながら

いつものように

少し足をブラブラ

いつものように

ママがとなりで なにやら難<sup>むずか</sup>しそうな本を読んでいます

今日はいつもとちがって 車内にはママと女の子しかお客はいません

今日は天気も良<sup>よ</sup>くって あたたかい

いつのまにか 女の子はぐっすり 眠<sup>ねむ</sup>ってしまいました

「しゅうてーん しゅうてーん」

・・・あれ！？ ここはどこ？ ママはどこ？



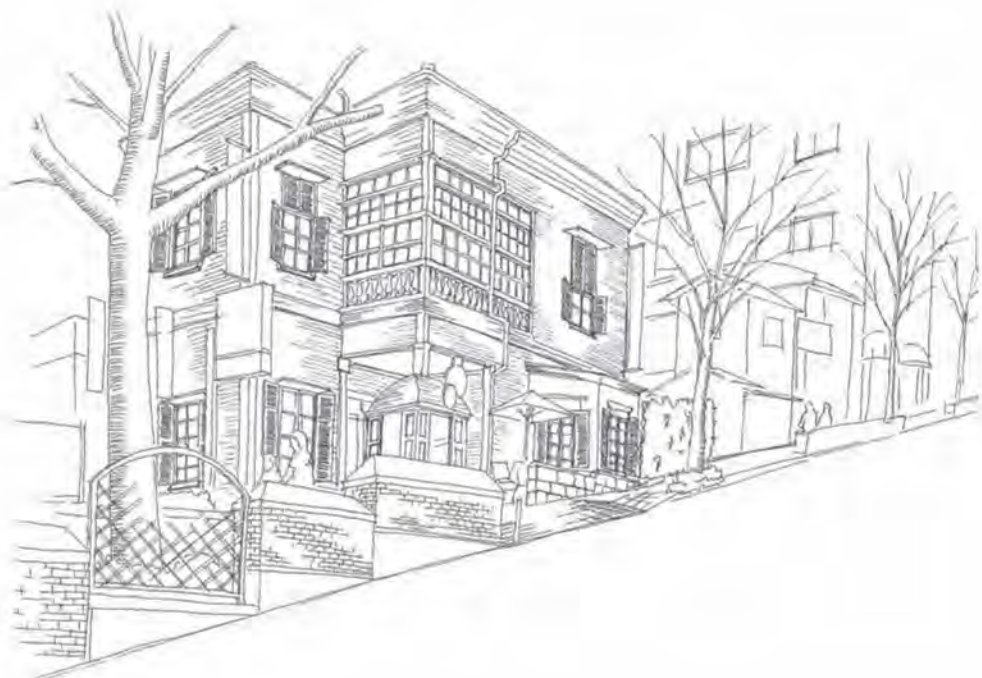
バスは いつのまにか 知らないまちに着いていました  
女の子は しかたがないので バスをお降りしました



そこは なんだか外国みたい  
かわいい お店  
かわいい 車  
かわいい おうち

・・・わたし 外国にきちゃったのかな？





あっちをみても こっちをみても

外国のおうちばかり 女の子の住んでいるところとは  
ぜんぜん  
全然ちがいます

・・・やっぱり バスでねているあいだに  
がいこくに きちやったんだ

女の子は急に <sup>ふあん</sup>不安になってきて  
<sup>なみだ</sup>涙がこぼれ落ちそうになりました



「もしもし おじょうさん  
<sup>こま</sup>お困りですか？」

そこは ひときわ立派な<sup>りっぱ</sup>おうちの前でした  
「おじょうさん どうかしましたか？」

．．．

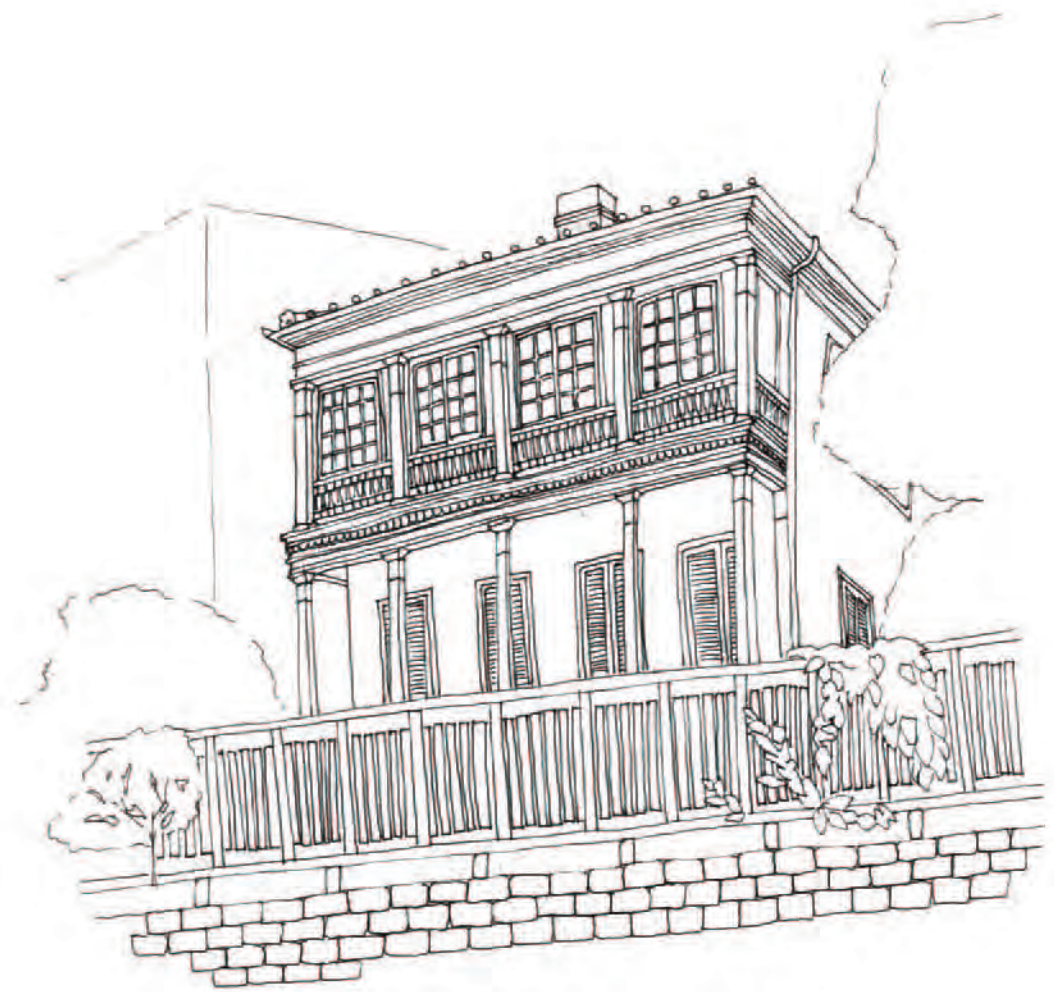
「おかあさんと はぐれたのですか？」

女の子は 小さくなづきました

「おじょうさんお名前はなんというのですか？」

老紳士<sup>ろうしんし</sup>は やさしく<sup>たず</sup>尋ねました

．．．あいこ



「エドワードさん <sup>ぼく かのじょ あんない</sup> 僕が彼女を案内しましょう」

<sup>とつぜん</sup> 突然 <sup>かんだか</sup> 甲高い声がひびきました

あいこは声のする方へ ふりむきました

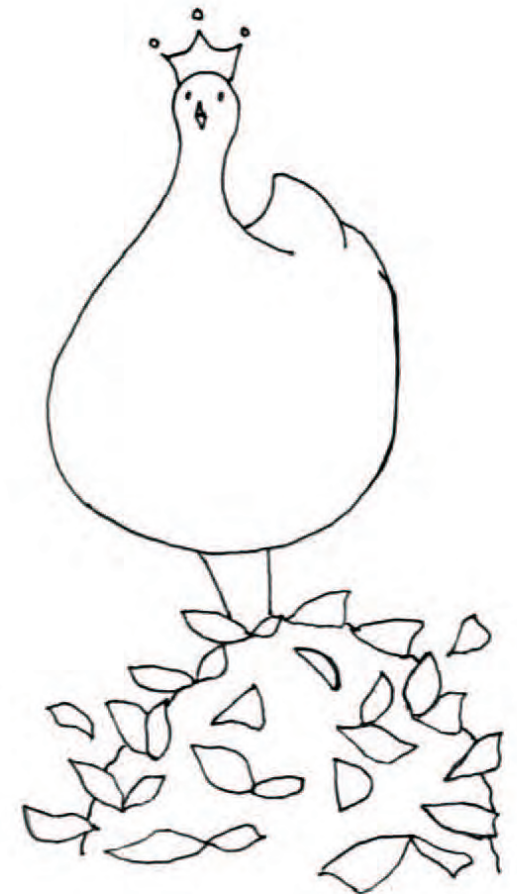
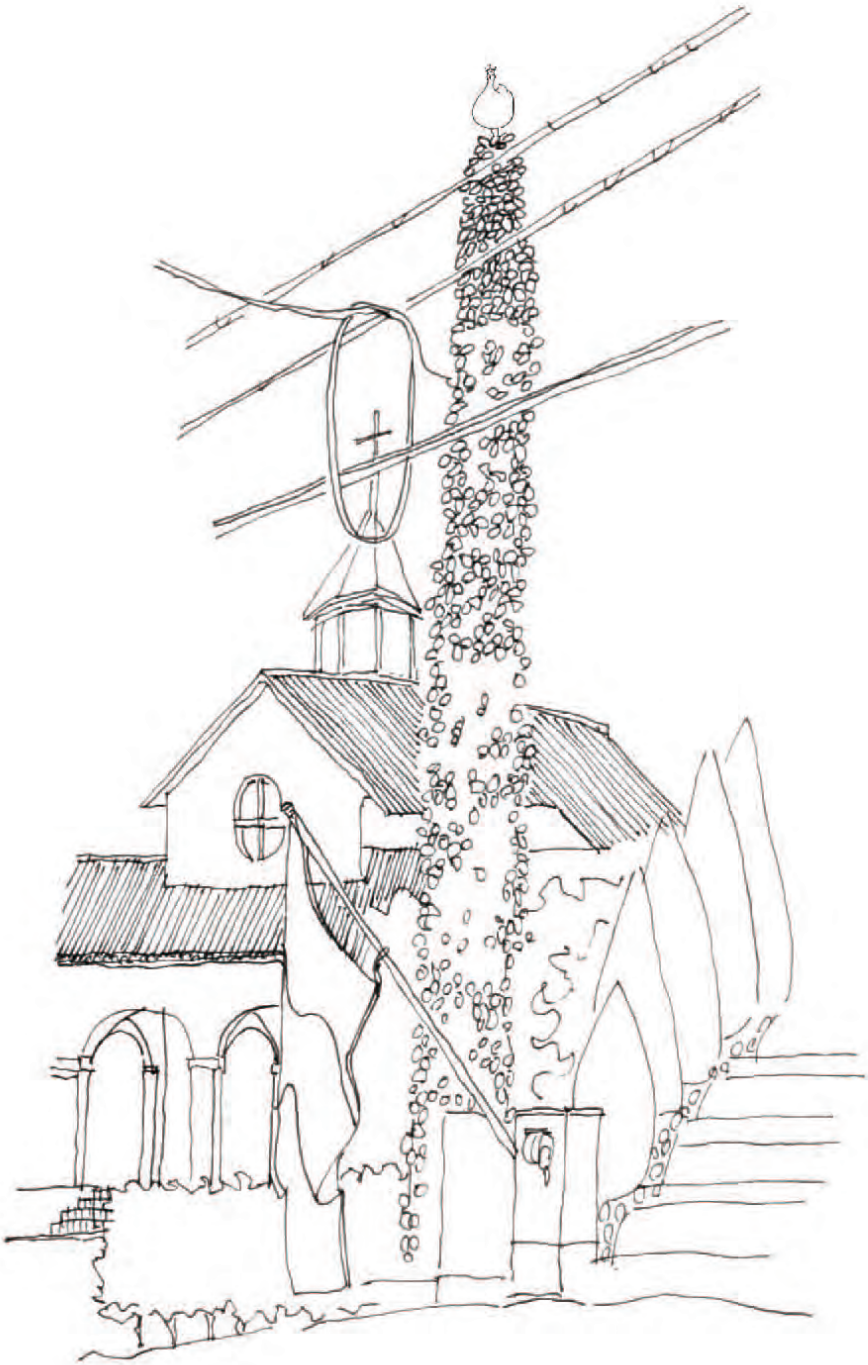
あいこはおどろきました

そこには オンドリがいたのです

・・・にわとり???

「キングです <sup>しつれい</sup>失礼なおじょうさんだ」

オンドリはおしりを 少しふるわせました



・・・え！？

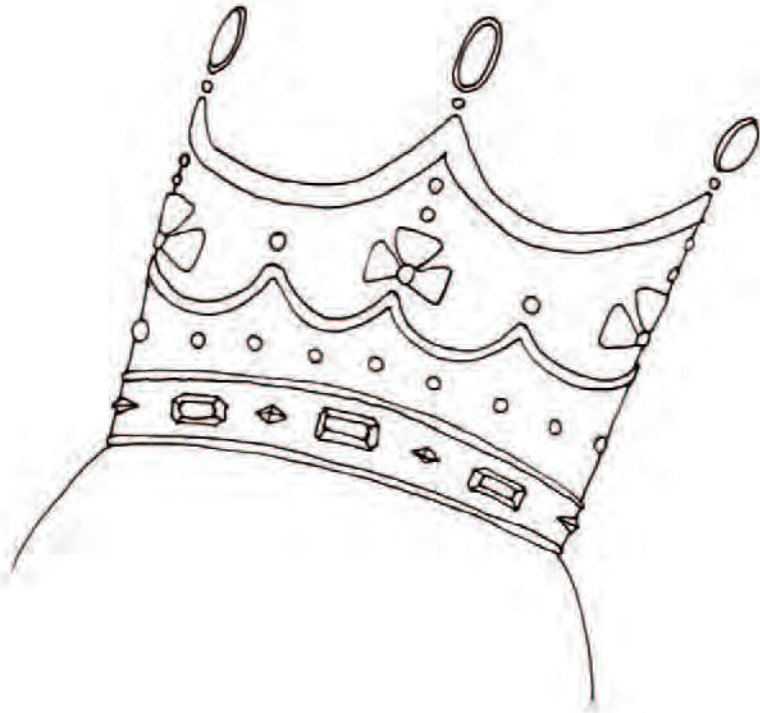
オンドリは <sup>りっぱ</sup>立派な<sup>おうかん</sup>王冠をかぶっています

「大丈夫 このまちで <sup>だいじょうぶ</sup>僕の<sup>ぼく</sup>知らないところなんて

ないのですから 安心して下さい」

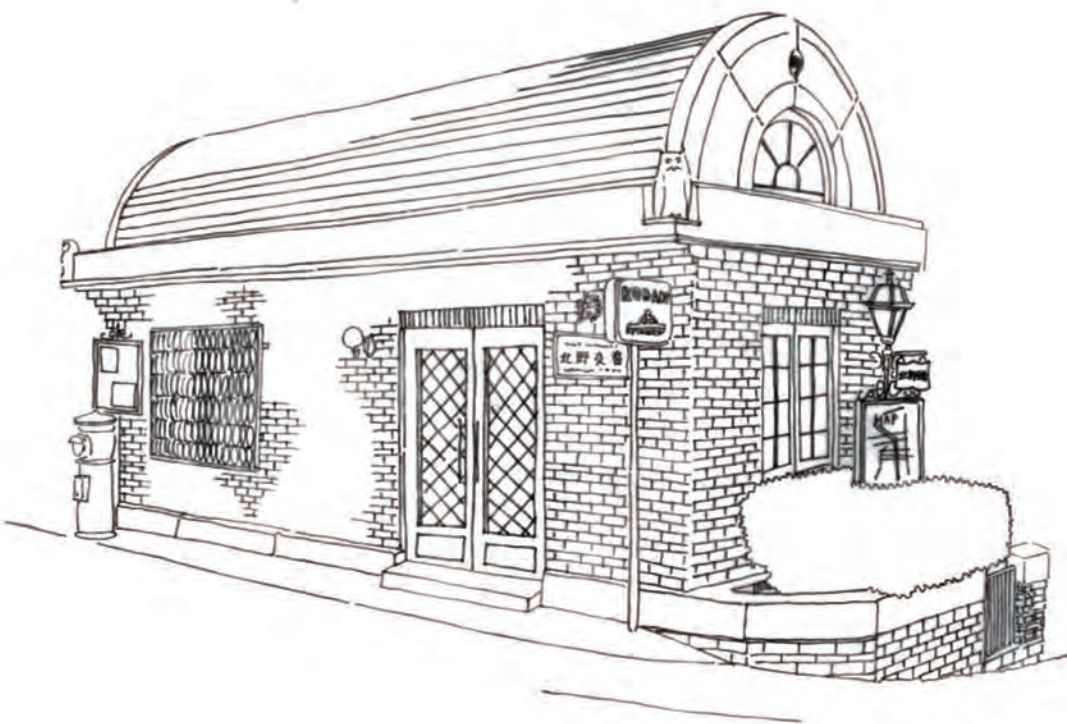
<sup>ろうしんし</sup>老紳士は <sup>たず</sup>少ししゃがれた声で おだやかに尋ねました

「キングさん よろしいのですか？」



「エドワードさん <sup>もど</sup>ちょうど戻るところですから」

オンドリは <sup>めくば</sup>あいこに目配せをしてから トコトコ トコトコ  
歩きだしてしまいました



・・・まって・・・

オンドリはドンドン進みます

しばらくすると

今度はフクロウとしゃべっています

あいこは また おどろきましたが このまちは  
みんなとお話ができて 楽しいと思いました

「こんにちは ミマモリさん」

「これは キングさん わざわざ

どうしたのですか」

「ちょっと まちの案内をね」  
あんない

「それは ごくろうさまです」

フクロウは ねむ 眠たそうな目で

あいこを見ながら ブルブルと羽を震わせました  
ふる



トコトコ トコトコ

しばらく 歩くと オンドリは いいます

「さて おじょうさん あそこのご婦人<sup>ふじん</sup>が 歩いて  
いるところに 階段<sup>かいだん</sup>と坂道がある おじょうさんは  
どちらに行きますか？」

・・・どこに つながっているの？

「それは 行ってみれば わかりますよ」

あいこは <sup>こま</sup> 困りました

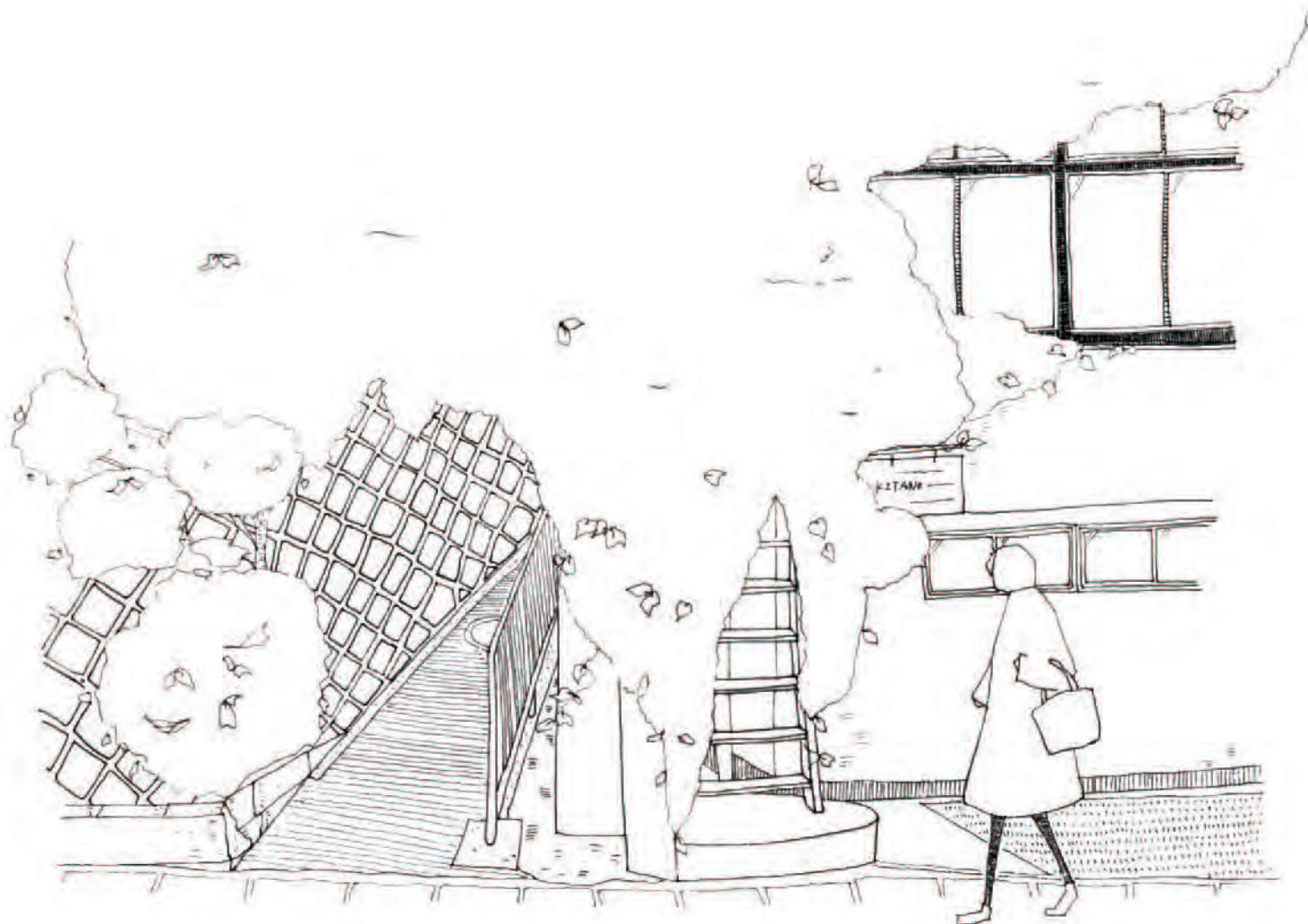
どちらも どこに行くのかわかりません

いつもはママがどこに行くにも  
連れて行ってくれるのです

・・・えっと

「そうですか では はじめに階段<sup>かいだん</sup>のほうから  
<sup>あんない</sup>案内しましょう」

そういうと オンドリは かつてに  
階段<sup>かいだん</sup>を ピョンピョンと2つ飛<sup>と</sup>ばしで  
<sup>のぼ</sup> 上って行ってしまいました



階段は ずーと <sup>つづ</sup> 続いています

<sup>のぼ</sup> 上ったり <sup>お</sup> 下りたり <sup>のぼ</sup> 上ったり <sup>お</sup> 下りたり

<sup>あか</sup> 少し明かりはあるけれど <sup>うすぐら</sup> 薄暗くてぶきみな感じ

あいこは いっしょけんめい オンドリについて行きました

「さあ つきましたよ」

オンドリの前には いつのまにか 大きな とびらがあります

・・・ガチャ・・・

・・・あっ！？

そこは ふしぎな <sup>たてもの</sup> 形をした建物の前でした

あいこたちは <sup>ふしぎ</sup> その不思議な形をした <sup>たてもの</sup> 建物から出てきました

<sup>かた</sup> 「この方は <sup>たいせつ</sup> とても <sup>かた</sup> 大切な方です」

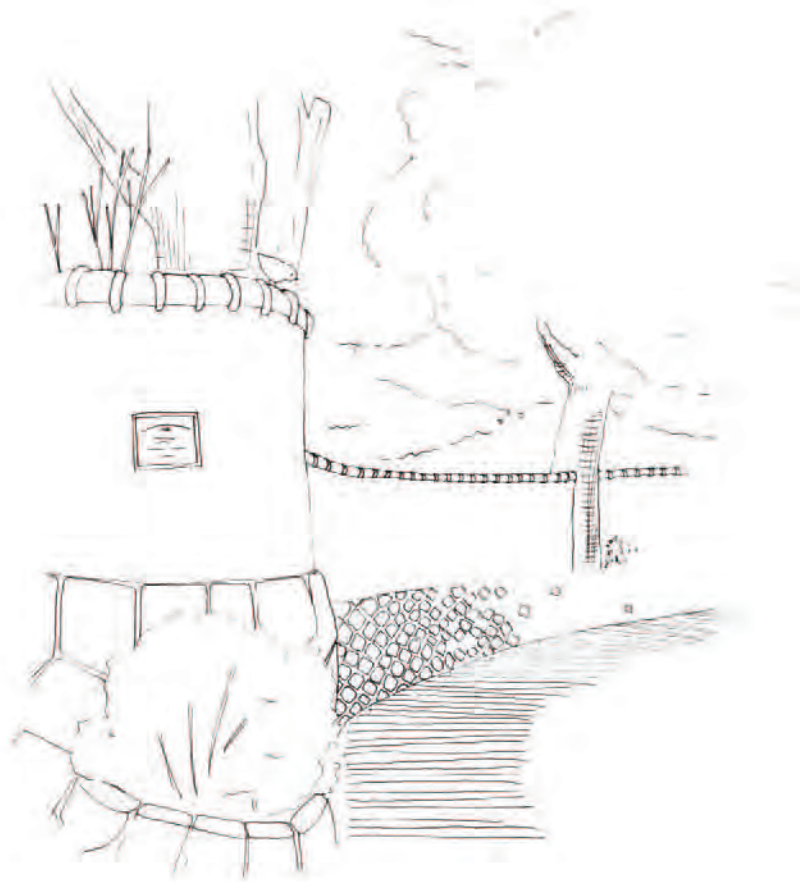
そういうと <sup>おうかん</sup> オンドリは王冠が落ちそうな おじぎをしてから

トコトコ トコトコ 歩きはじめました

あいこは なにが大切かわかりません

けれども オンドリのまねをして おじぎをしてからついて行きます

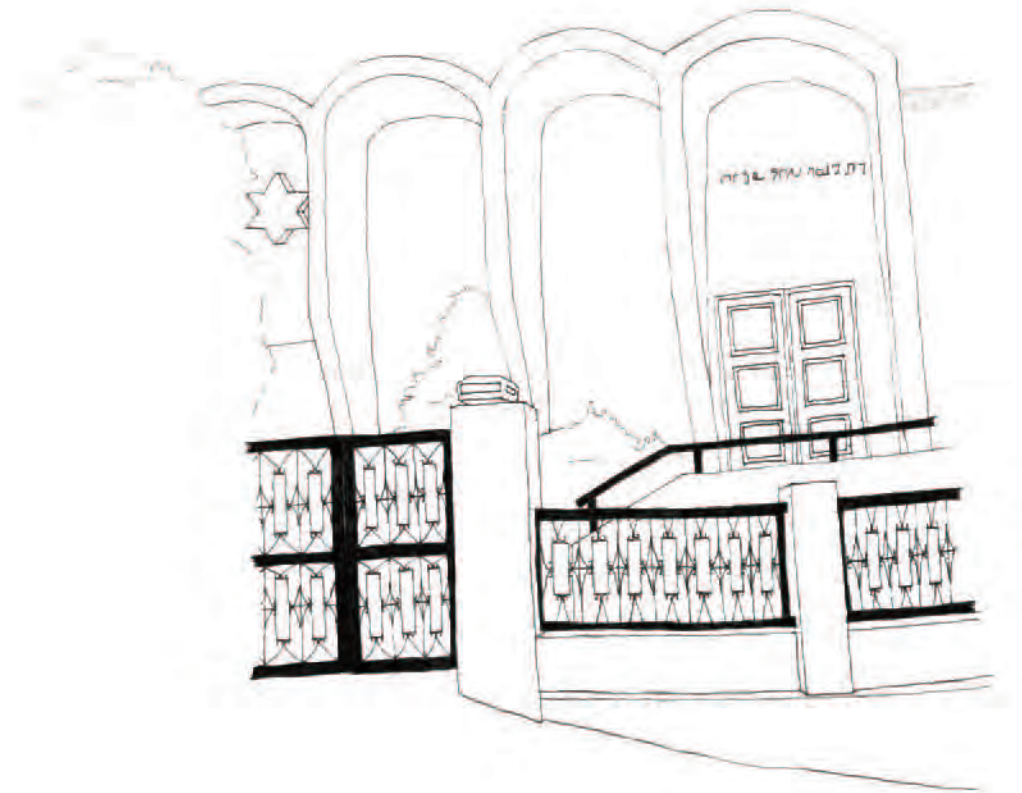




歩いていると 少し不思議なものに出会います  
 とちゅう 不思議なへいがありました  
 このへいは まっすぐではありません  
 ウネウネしていて へびみたいにも見えます  
 でも あいこは 大好きなロールケーキを 思い出しました  
 あいこは まるまったロールケーキを いつもほどいてから食べるので  
 そのへいは 食べる直前のロールケーキにそっくりに見えました

トコトコ トコトコ

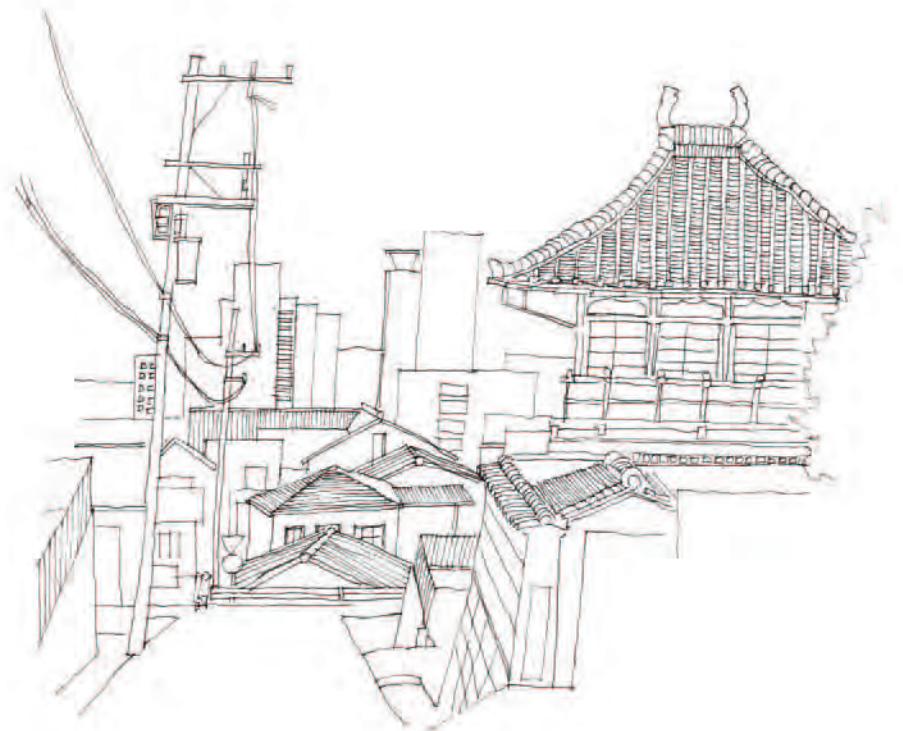
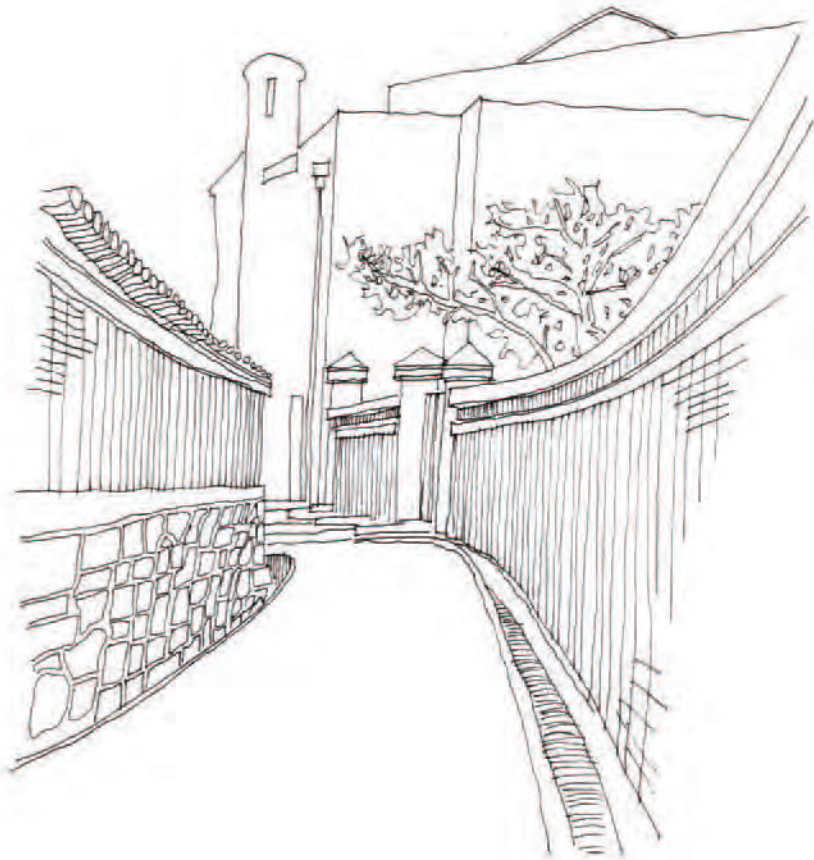
また しばらく 歩いていると 不思議な建物がありました  
 「この方も とても大切な方です」  
 また オンドリは王冠が落ちそうな おじぎをします  
 あいこも また オンドリのまねをして おじぎをします  
 でも あいこは なにが大切かわかりません



トコトコ トコトコ

こんどは 木でできた <sup>いしがき</sup>へいに石垣 <sup>かわらの</sup>屋根までついていきます  
なんだか 見たことのある風景で <sup>ふうけい</sup>あいこは安心しました

オンドリは ドンドン ドンドン 進みます



オンドリは ズンズン ズンズン 休むことなく進みます  
あいこは 少し<sup>つか</sup>疲れてきました  
もう ずいぶん<sup>のぼ</sup>上ってきています  
あいこは 立ち止まって 後ろ<sup>ふ</sup>を振り返りました

・・・あっ!?

お寺が見えます どうやら ここは日本みたい  
あいこは すごく安心しました  
でも オンドリは待ってくれません  
ママはいつも あいこを待ってくれるのに

オンドリは やっと 止まりました  
ここは もう森のなかです  
ずいぶんと おくまで来てしまいました  
「この方も とても大切な方です」  
オンドリは また 王冠の落ちそうな  
おじぎをしました  
あいこは 今回は 手を合わせて  
おじぎをしました  
いつも ママと一緒にそうしているからです

「どうして この方が 大切かわかりますか  
おじょうさん？」  
あいこは知っていました  
ママに聞いたことがあるのです

・・・かみさまの おうちだから

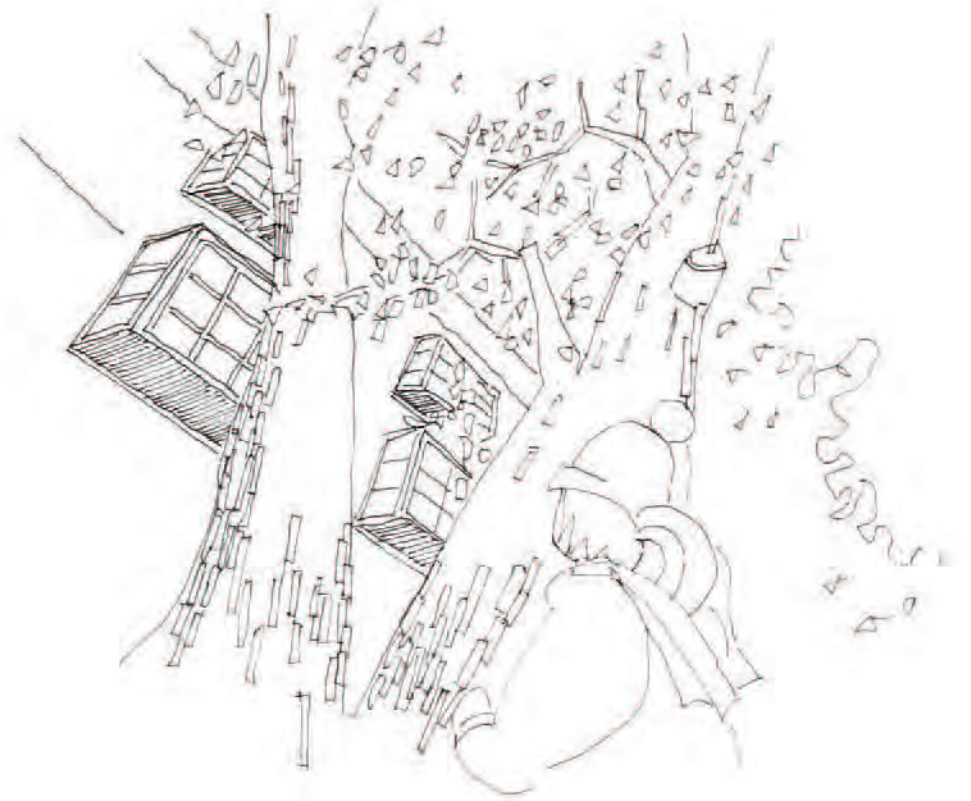
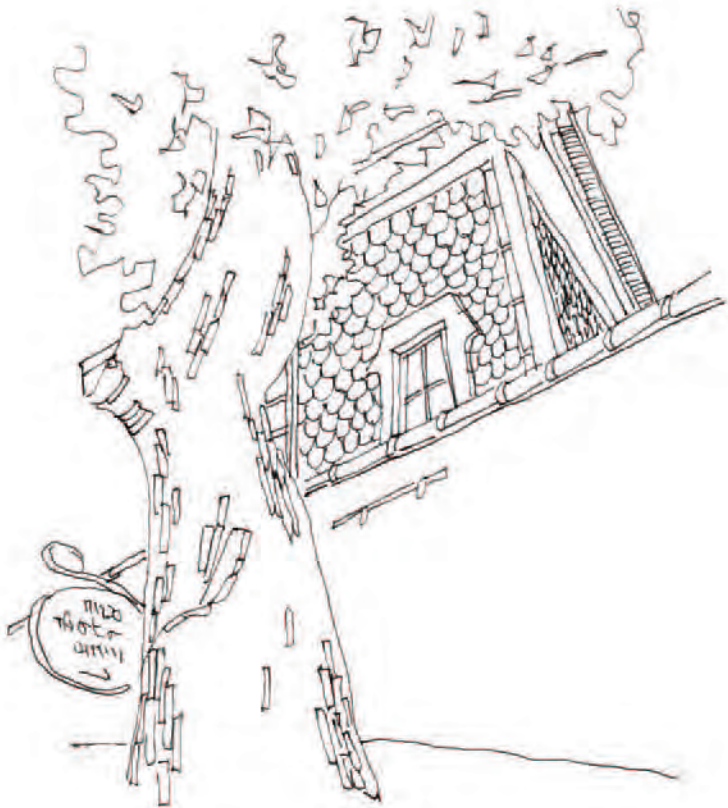
「そうですね では さきほどの方々は  
どうですか？」  
あいこは わかりません  
「あの方々も かみさまのおうちです  
ここからは ずっとと遠い国のね」  
あいこは ハッと しました

そして ママに会えるように  
お祈りをしました



「ずいぶん 歩きました そろそろ ティータイムにしましょう  
森をぬけると レストランがあります」  
あいこは ホツとしました  
ロールケーキのへいを 見たあたりから  
ずっとおなかが すいていたのです

オンドリはまた 歩きだしました  
こんどは 少しゆっくり <sup>しず</sup>静かに歩いているみたい  
いつもの甲高い声 <sup>かんだか</sup>を 少し低く <sup>ひく</sup>しながら  
「このあたりは <sup>かたがた</sup>森の方々が 住んでいるからね  
<sup>しず</sup>静かに通らなくてははいけません」



オンドリは <sup>おさ</sup>また 声を抑えながら落ち着いた口調でいいました  
「森の方々は <sup>かたがた</sup>とてもやさしくて おだやかな方々なのです  
だから わたしたちも <sup>しず</sup>静かに通らなくてははいけません」  
そういうと オンドリは 大きくて ふたまたに分かれた木に  
おじぎしました  
その木は <sup>みあ</sup>あいこが 見上げても先がみえません  
あいこは 森がピースしてるみたいに見えて 少しおかしく感じました



・・・わあ！？

あいこは おどろきました

とても とても 大きな木です

さっきの ふたまたの木よりも まだ大きな木です

「この森<sup>かた</sup>の方はずっと ここで まちを 見守っている

ぼく<sup>ぼく</sup>がいちばん尊敬<sup>そんけい</sup>している方<sup>かた</sup>なんだよ」

そういと オンドリは羽を広げながら

おうかん<sup>おうかん</sup>の落ちそうなおじぎをしました

あいこも まねをして スカートの裾<sup>すそ</sup>を広げながら

じょうひん<sup>じょうひん</sup>上品におじぎをしました



森をぬけて トコトコ トコトコ

はんぶん 日本みたいなへい

はんぶん 外国みたいなへい

はんぶん はんぶんの道をぬけると



「さあ つきましたよ」

おなかが ペコペコのあいこは すぐに

かいだん 階段に 小さな足をかけて上ろうとしました

「そうそう レストランは 左のとびらですよ 右のとびらは  
開けてはいけません」

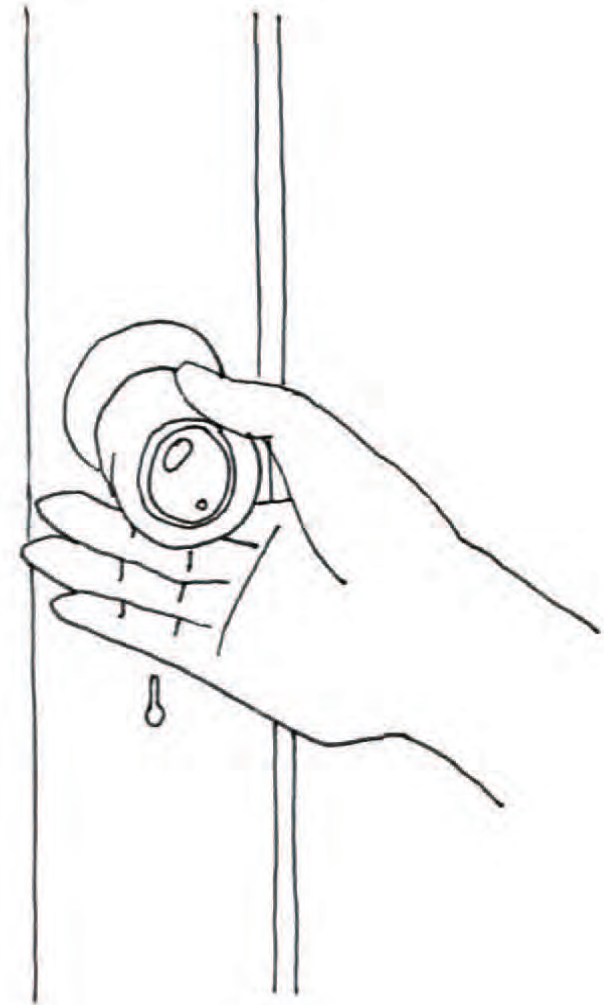
そういうと オンドリは かいだん ピョンピョンと階段を上って  
レストランに入ってしまった

あいこにも見れば左がレストランだとわかります

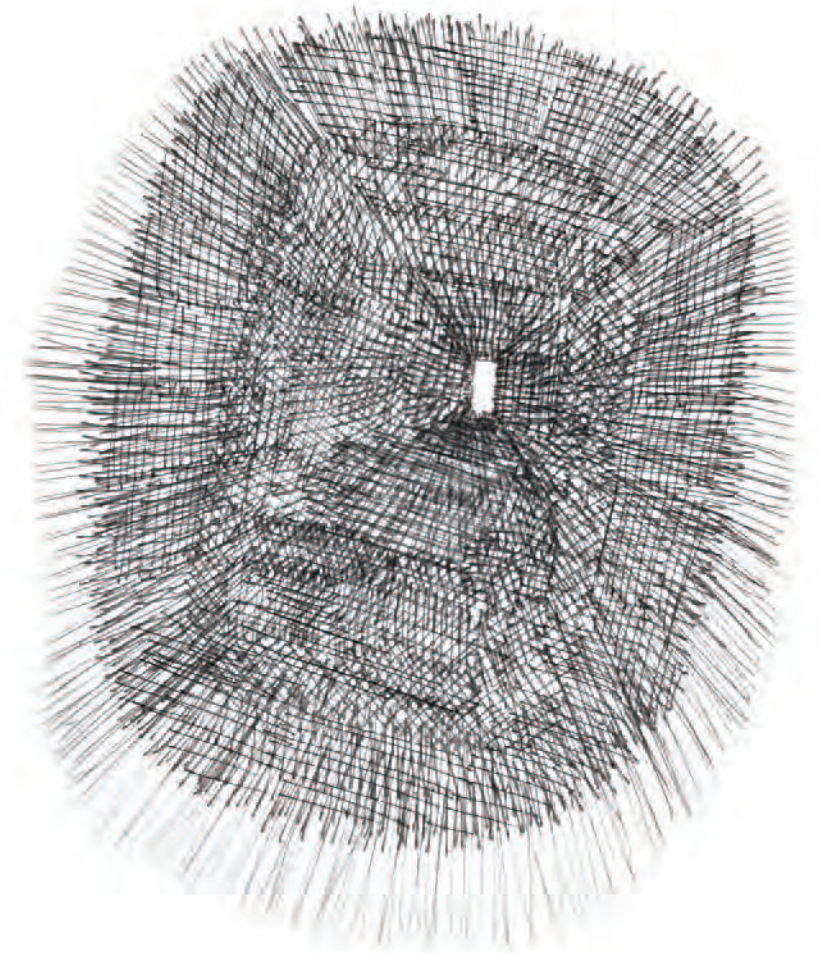
どうしてオンドリは そんなことをわざわざ言うのでしょうか

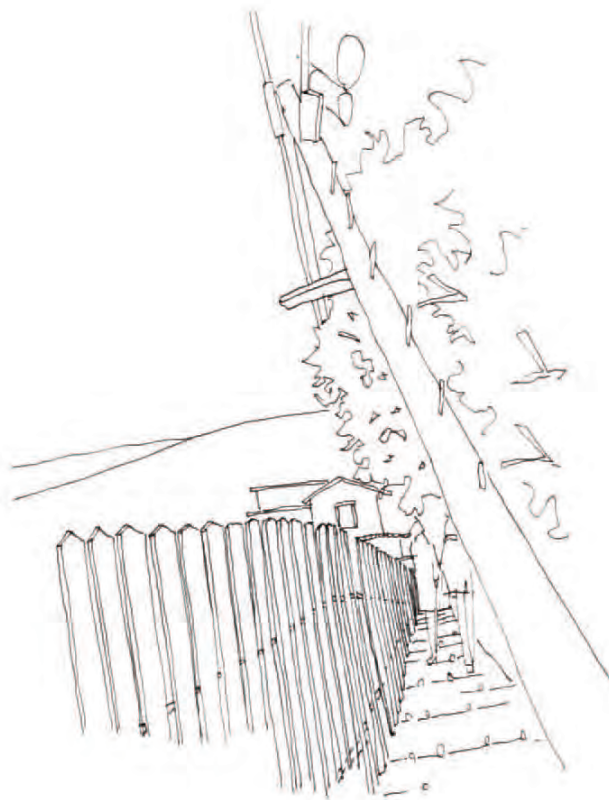
だめと いわれると だめなのです  
やるなと いわれると やりたくなるし  
見るなと いわれると 見<sup>あ</sup>たくなる  
開<sup>あ</sup>けるなと いわれると 開<sup>しょうぶん</sup>けてしまうのです  
あいこは そういう 性分<sup>しょうぶん</sup>なのです

ガチャ



・・・きやあ！！！！





・・・！！？

とびらから 入ったはずなのに  
 いつのまにか ここは外  
 しかも すごい坂道です  
 きれいな緑色の柵が ずっと  
 続いています  
 後ろを<sup>ふ</sup>振り返<sup>かえ</sup>っても  
 とびらはありません  
 あいこは 目をパチパチして  
 とびら<sup>さが</sup>を探しましたが  
 とびらはありません  
 しかたがないので 坂道を  
 トボトボ トボトボ  
 歩きはじめました



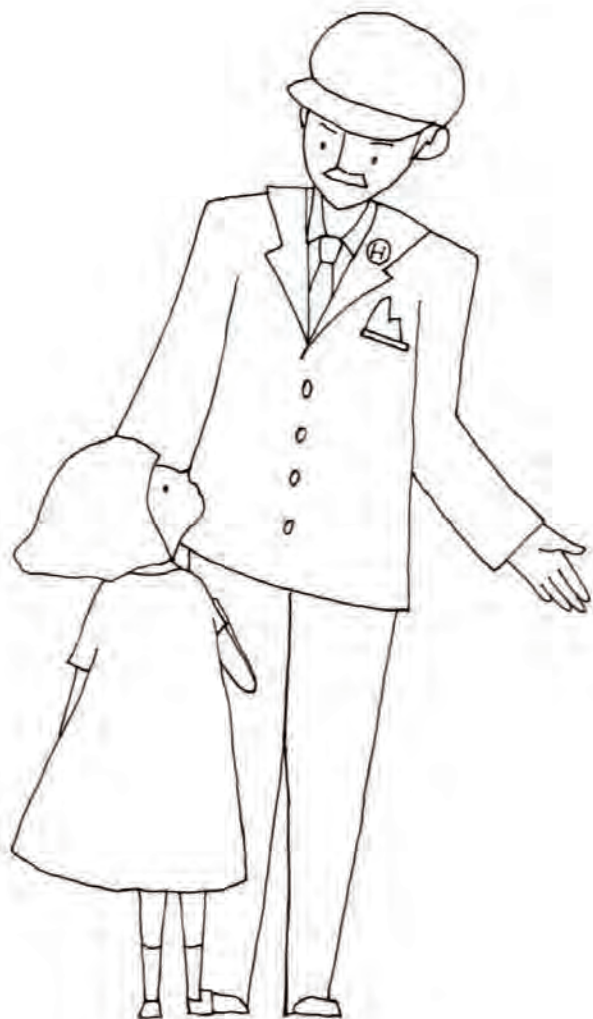
行けども  
 行けども  
 坂道です

オンドリのいうことを 聞かなくて  
 また ひとりになってしまいました  
 しかも ずっと 坂道で もうヘトヘトです  
 おなかも ペコペコで  
 あいこは <sup>すわ</sup>座りこんでしまいました

・・・おなかすいたなあ

あいこは <sup>こうかい</sup>後悔しました  
 あの時 ちゃんと オンドリ<sup>こうちや</sup>のいうことを 聞いていれば  
 いまごろ おいしい ケーキと紅茶を 食べていたはずですが  
 また <sup>なみだ</sup>涙がこぼれ落ちそうになりました





「どうしました？ おじょうさん」

あいこが <sup>つか</sup>疲れて<sup>すわ</sup>座り込んで<sup>こ</sup>いると

<sup>せ</sup>背の高い<sup>しんし</sup>紳士が話かけてきました

「道にまよったのですか？ わたしはハンターといいます

おこまりであれば <sup>せ</sup>話を<sup>しんし</sup>ききましよう」

その背の高い紳士は とても おだやかな目をしています

あいこは これまでの いきさつを話しました

「そうですか それは <sup>こころぼそ</sup>心細い<sup>だいじょうぶ</sup>ですね なに 大丈夫ですよ

キングさんは <sup>さが</sup>あなたを<sup>かれ</sup>きつと探<sup>さが</sup>していますし 彼はとても目がいい

それに <sup>かれ</sup>このまちのことで 彼の知らないことはないのですから」

<sup>せ</sup>背の高い<sup>しんし</sup>紳士が <sup>おこ</sup>そういうとあいこは 少しほっとしました

きつと オンドリは <sup>おこ</sup>怒<sup>おこ</sup>って帰ってしまったと 思っていたからです

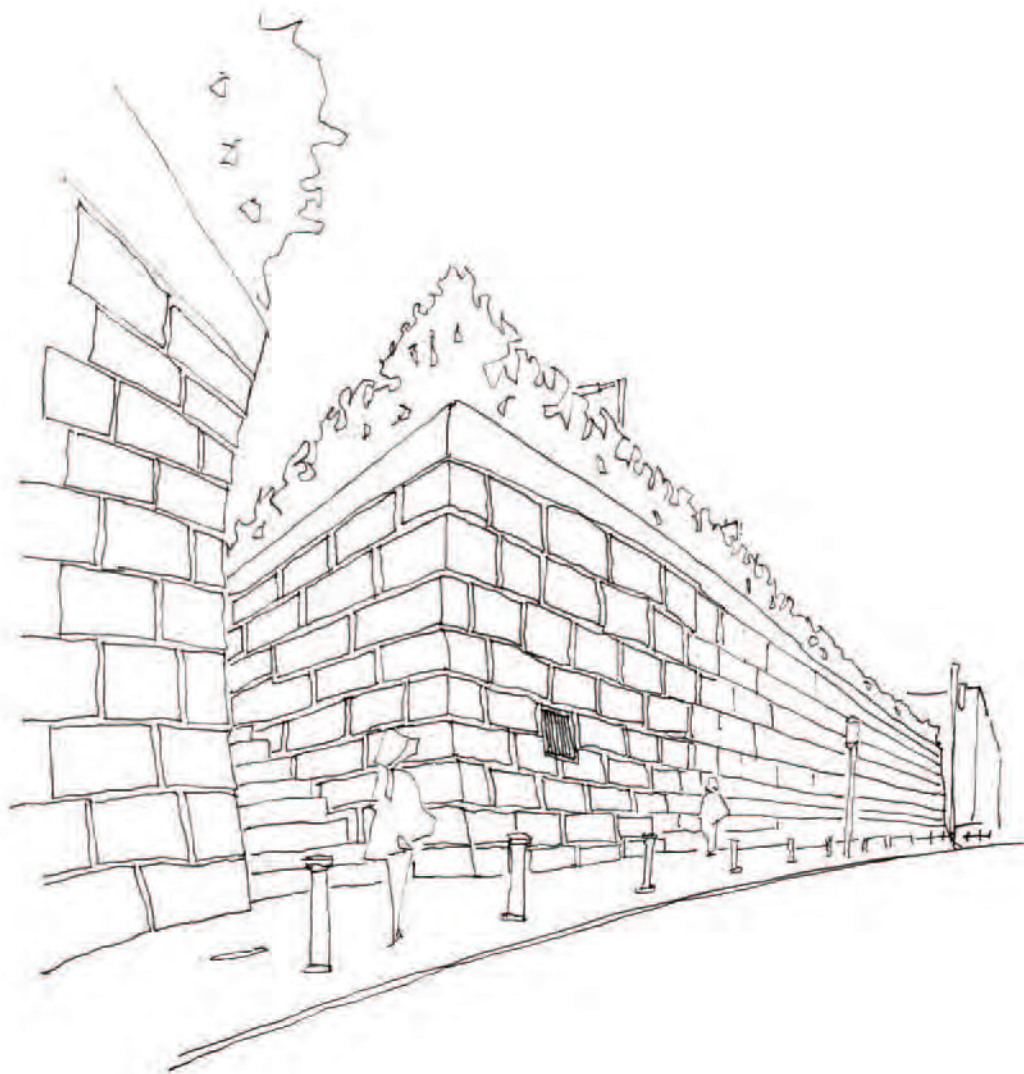
「ではこうしましょう キングさんが <sup>かお</sup>こちらに来るまで わがやで

ティーでもいかがかな？ もちろん<sup>かお</sup>香り高いティーに

ぴったりのケーキもご用意しますよ」

あいこは <sup>よろこ</sup>おなかがすいていたので とても喜びました

ロールケーキだと いいなと あいこは思いました



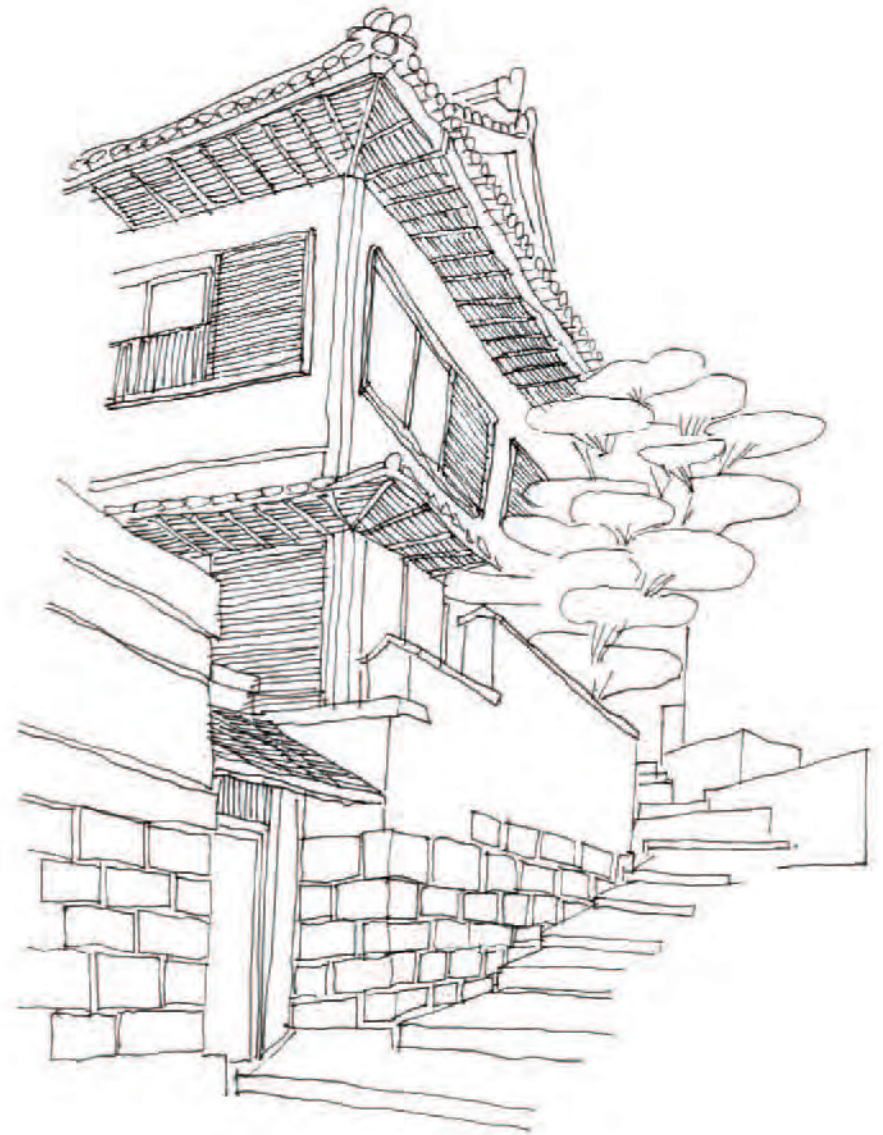
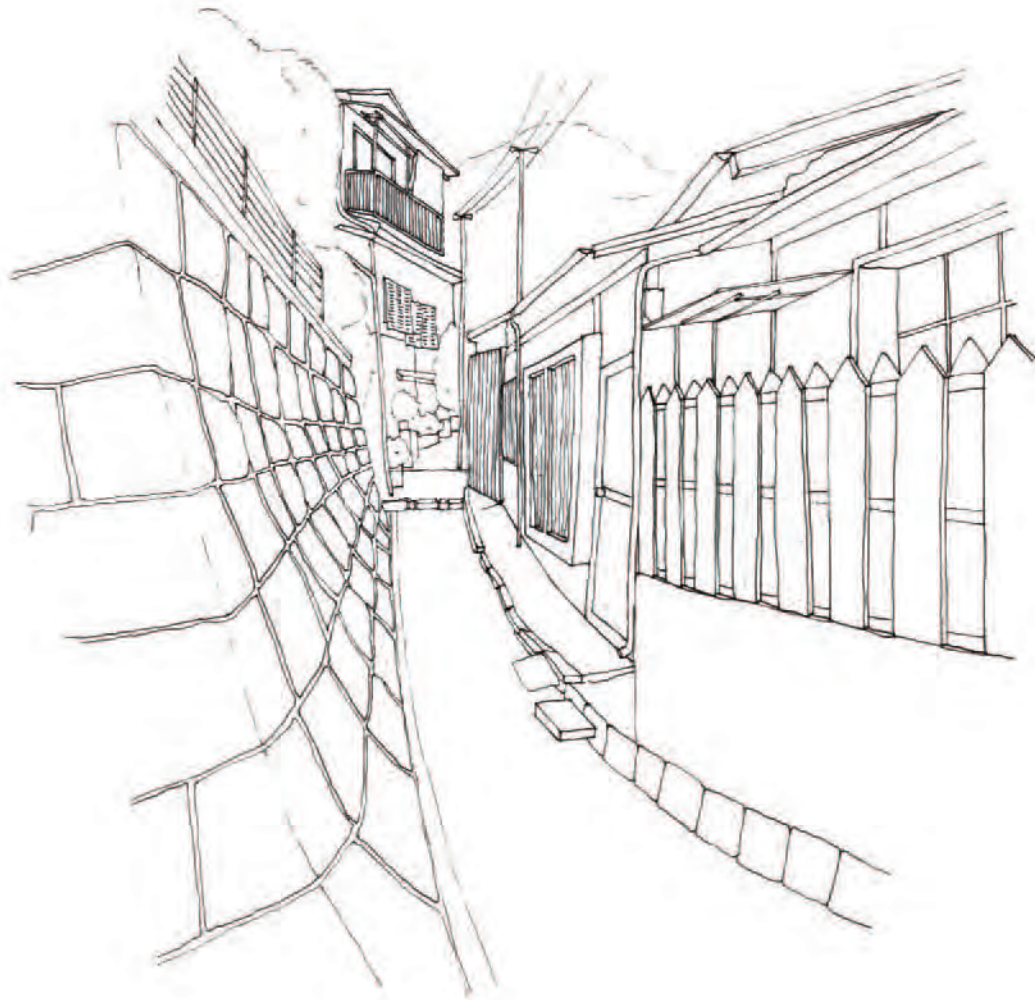
あいこは 背<sup>せ</sup>の高い紳士<sup>しんし</sup>に ついて行きました  
背<sup>せ</sup>の高い紳士<sup>しんし</sup>の 一歩は あいこの 三歩  
でも 背<sup>せ</sup>の高い紳士<sup>しんし</sup>は ゆっくり 歩いてくれるので平気<sup>へいき</sup>です

しばらく歩くと 大きなへいがありました  
とても大きな へいなので 背<sup>せ</sup>の高い紳士<sup>しんし</sup>が 背<sup>せ</sup>の 伸びても  
いちばん上には とどきません

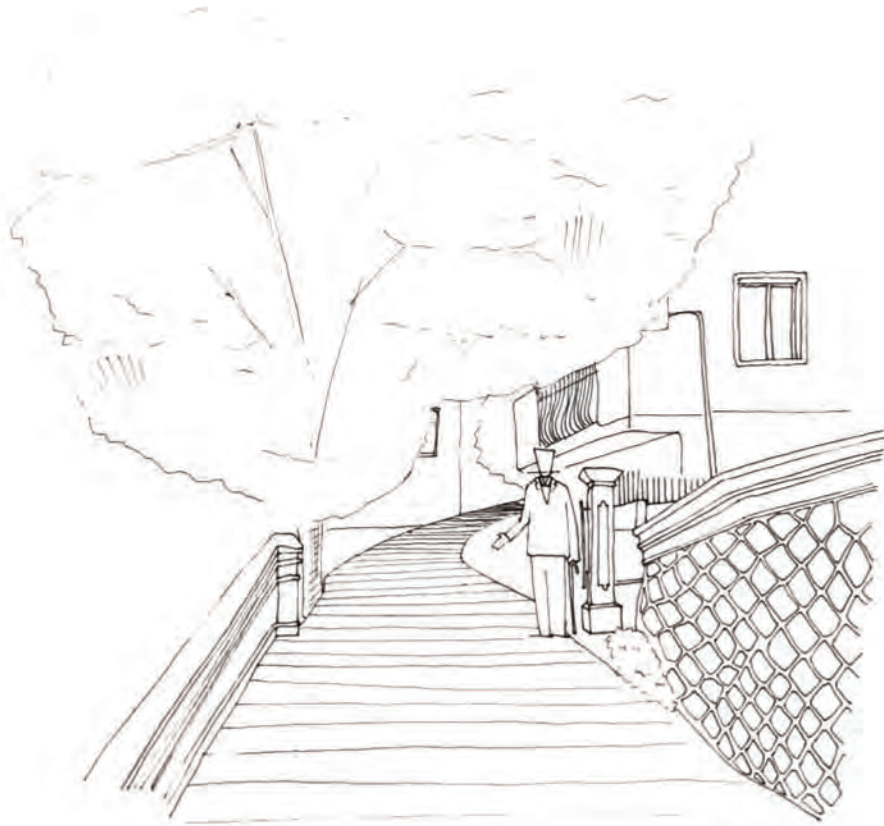
そこをすぎて またしばらく歩くと  
レンガのへいの角<sup>かど</sup>に 真<sup>ま</sup>っ赤<sup>か</sup>なポストがありました  
あいこの 知<sup>し</sup>っている四角<sup>しかく</sup>いポストではありません  
あいこは また なんだか外国<sup>がいこく</sup>みたいと思いました



しばらくすると こんどは細い道を通りました  
 ここはとても日本的で 背の高い紳士は  
 この道がとても好きだと 教えてくれました



背の高い紳士が 好きなこの道には 日本のおうちがたくさんあります  
 背の高い紳士は 外国のひとなのに 日本のおうちがとても好きだと  
 教えてくれました



背の<sup>しんし</sup>高い紳士は あいこに いろいろ教えてくれました

<sup>とちゅう</sup>途中でみた Hのついたへいは 昔のおうちのへいだったこと  
ここで いろいろな仕事をしたこと 日本を愛していること  
みんなが 坂に自分の名前をつけてくれて うれしかったこと  
そして このまちの名前も

背の<sup>しんし</sup>高い紳士は 大きな木のしたに 立ち止まっていた  
「ようこそ わがやへ」

・・・ここが ハンターさんの おうちですか???

「そうですよ おじょうさん」

あいこは <sup>ふしぎ</sup>不思議におもいました そこには <sup>なん</sup>何にもありません  
背の<sup>しんし</sup>高い紳士は にこやかに おちついた口調で話してくれました

ここは 背の<sup>しんし</sup>高い紳士の 昔のおうちの門があったところだったのです

あいこは <sup>むずか</sup>難しくて はんぶんくらいしか わかりませんでした  
しかも おなかが すいているのです



「おっと すいません まずは ティーをお出ししないと」  
そういと ハンターさんは ゆびをパチンとやらしました

・・・わあ！！！！

あいこは おどろきました そこに かわいらしい  
テーブルとイスがあらわれたのです  
テーブルの上には ティーポットと三人分のティーカップが  
置いてあります  
「おっと 大事なものを わすれていたね」  
ハンターさんは また ゆびをパチンとやらしました

・・・！！！！

あいこは とてもうれしくなりました  
お皿にのった とてもおいしそうな ロールケーキがでてきたのです  
「そろそろ 来るはずですが・・・」



「ここに いましたか」

かんだか  
甲高い声がひびきます

「ああ キングさん いらっしゃい まっていましたよ

これからちょうどティータイムです」

せ しんし ひく  
背の高い紳士の声が よほど低く聞こえます

「ハンターさん それはありがたい さきほど レストランから  
なにも食べずに 飛び出してきたところでね」

チラリとあいこのほうに 目をやりながら オンドリはいいました  
どうやら オンドリは さがずっとあいこのことを 探してくれていたのです  
あいこは うれしい気持ち はんぶん

・・・ごめんなさい

おうかん  
オンドリは 王冠をゆらしながら ニコリとしました



せ しんし ものし  
背の高い紳士は とても物知りです

こう ちゃ  
おいしい紅茶を飲みながら あいこにいろいろお話してくれます

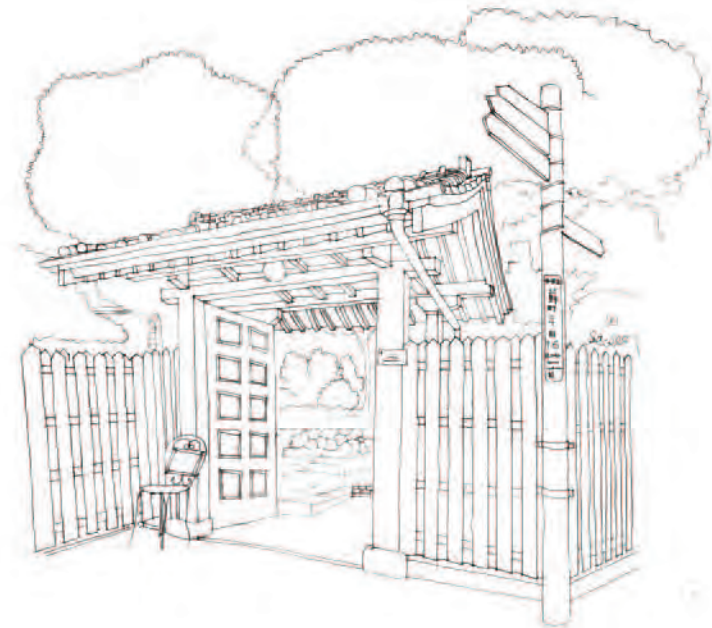
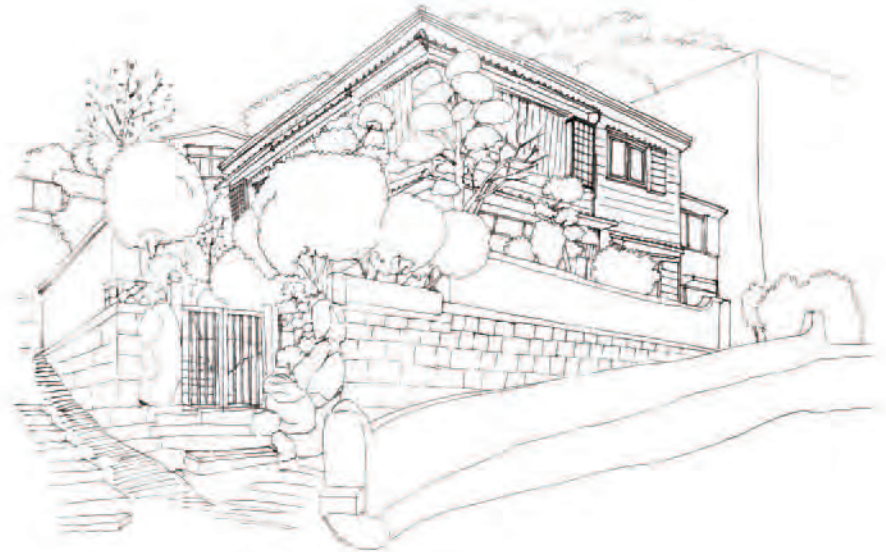
あいこは そのなかで ワヨウセツチュウという言葉が気に入りました

日本と外国の文化が混ざっている建物のこと <sup>たても</sup>です

せ しんし  
背の高い紳士は それをととても美しいといっていました

あいこは 背の高い紳士は 外国のひと <sup>せ しんし</sup>だけど

心は日本のひとなので ワヨウセツチュウだと思いました



・・・ごちそうさまでした ハンターさん

あいことオンドリは お礼を 何度もいってから そこを立ち去りました  
「さて おじょうさん だいたい このまちは見回ったね  
あとはそうだな ・・・すてき小屋には 行ったのかい？」

・・・すてきごや??

「そう・・・行ってないとなると・・・まあ・・・  
むり ひつよう  
無理に行く必要もないわけだが・・・どうだろう」

オンドリは なぜだかソワソワしています

あいこは すてき小屋と聞いて すぐに行ってみたくまりました  
「まあ もう あそこに見えるわけだが・・・」

あいこが オンドリの 目線のほうをむくと

そこには小さな小さなうち お花にいっぱいかこ囲まれています  
「・・・たずねてみるといい」

オンドリはいつもより 低い小さな声でいいました



小さなおうちは ドアが開いていて  
そこから いろいろなものが見えます

きらきらと光るベル 美しい風景が描かれた絵 象のようなシャンデリア  
細かく彫刻された箱 いまにも動き出しそうな猫の置物  
コンコン コンコン

・・・こんにちは

「・・・」「・・・」

返事はありません

あいこは おそろおそろ ドアから顔をのぞかせます

「・・・」「・・・」

・・・だれかいますか？

「目の前にいるだろう なにかようかい？」

あいこは おどろきました 黒い猫の置物が 話しかけてきたのです

「おどろかしてはだめよ」

あいこは また おどろきました 白い猫の置物もしゃべったのです



すてき小屋は <sup>ひき</sup> 2匹の猫のおうちだったのです  
あいこは オンドリはここに来るのが <sup>こわ</sup> 怖いのだとおもいました

・・・猫さんは <sup>ねこ</sup> ここで なにをつくっているの？

「ぼくは まちをすてきに するものを 作っているのさ」

クロネコがいます

たしかに おうちのなかには すてきなものがたくさん

・・・クロネコさん これなあに？

「まちを 明るくてらすのさ」



・・・クロネコさん これなあに？  
「人と車が ぶつからないようにするのさ」



・・・クロネコさん これなあに？  
「手紙を いれるポストさ」



・・・クロネコさん これなあに？  
「火事がおきたときに ここから 水を  
ひっぱりだすのさ」



クロネコは <sup>じまん</sup> 自慢たっぷりになっています



・・・シロネコさんは　ここでなにを　つくっているの？

「わたしは　まちを　すてきにしているものを　まもっているのよ」

「けっきょく　なにも　作っていないのさ」

「あなたは　いつも作るだけね　すてきなものを　まもるほうが大事よ」

「それは　ちがう　作るほうが大事さ」

「まもるほうよ！」「作るほうだ！」

『今日こそ　シロクロつけてやる！！！』

とうとう　ケンカが　始まってしまいました

・・・ストップ！！！！

あいこは　今日一番大きな声をだしました

『あなたは　どちらが大事だとおもう？』

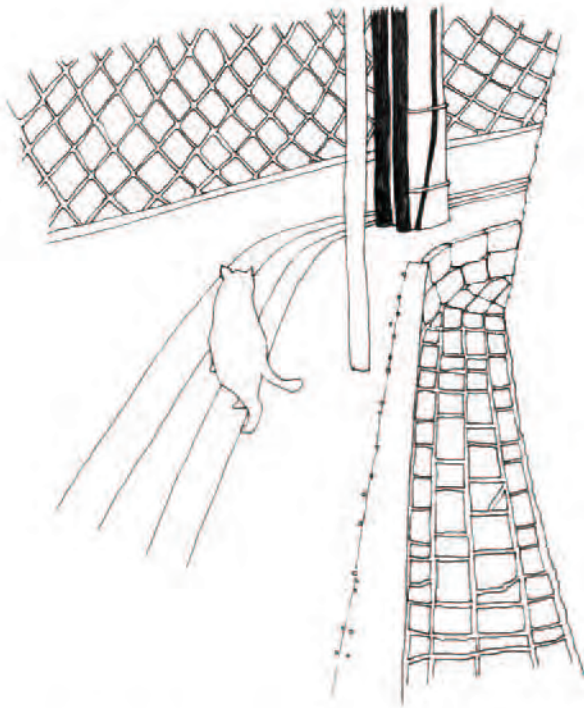
あいこは　こまってしまいました

・・・クロネコさんのすてきなものは見せてもらったけれど　シロネコさんの  
すてきなものは　見せてもらっていないから・・・

「そうね　じゃあ　ついていらっしやい」

そういうと　シロネコはクロネコにツンとして　小屋をでて行ってしまいました





シロネコは 小屋をでると すぐ立ち止まりました  
「その溝<sup>みぞ</sup>をみて レンガ<sup>し</sup>が敷いてあるでしょ  
これは ずっとわたしたちが このまちをすてきにするために  
まもってきたものなの」  
シロネコは リンとした口調でいいます  
「あなた ハンターさんにお会いになって？」  
あいこは うなずきました  
「ハンターさんの門やへいも わたしたちがまもってきたの  
ほかにもいろいろな場所を まもっているわ」  
あいこは 背の高い紳士<sup>しんし えがお</sup>の笑顔をおもいだしました

「後ろを見て」

あいこは ふりむきました

「ここから見える 風景<sup>ふうけい</sup>

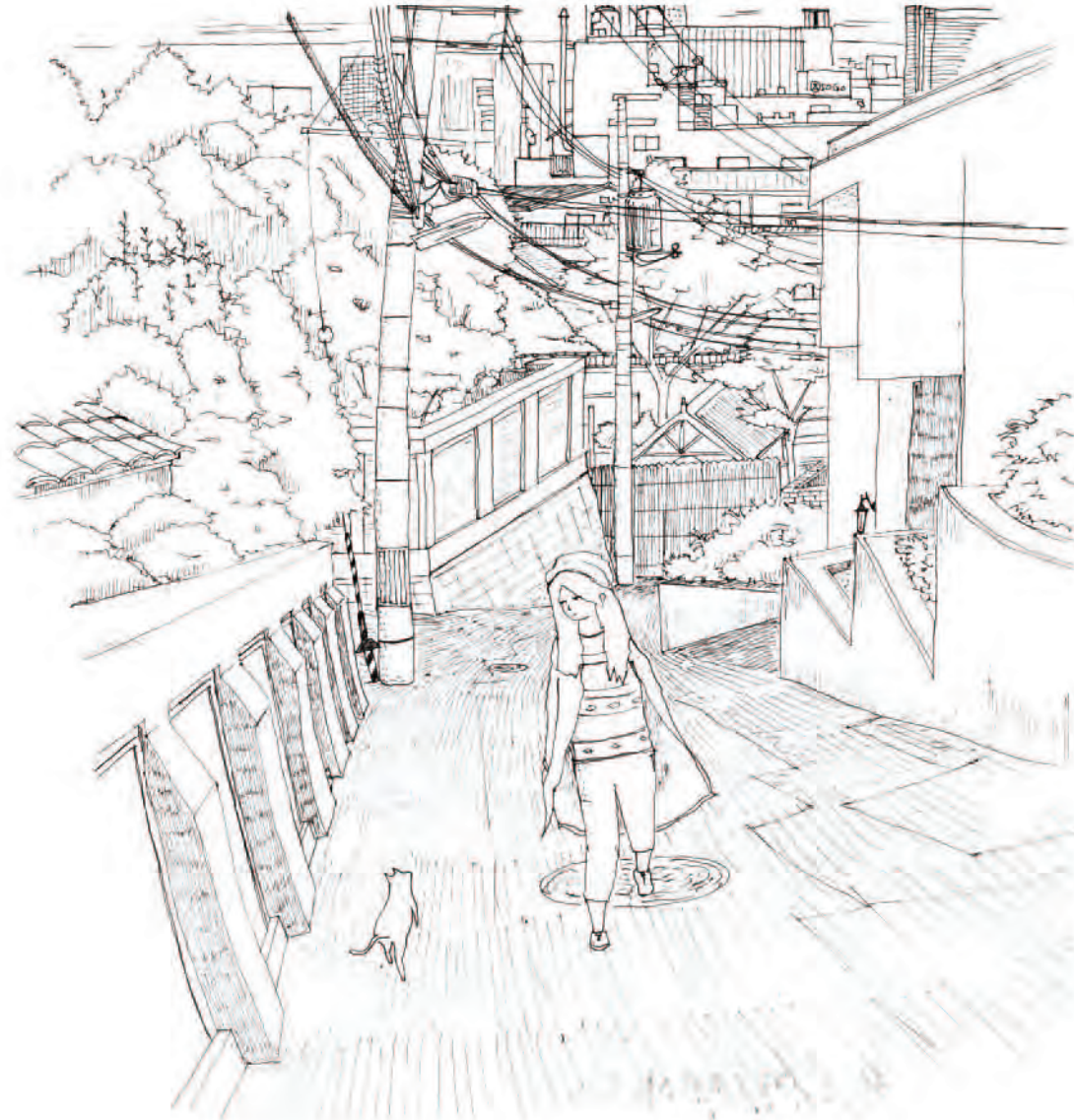
これがこのまちのすてきなところだと わたしはおもうの」

あいこは 少しシロネコのいうことが わかる気がしました

「あっ もう行かなくちゃ クロネコ<sup>あやま</sup>に謝らないといけないわ」

そういうと シロネコはそそくさと 小屋にもどっていきました

あいこは 本当は仲がよいのかなと思いました



「ふう シロネコは帰ったようですね」

シロネコがいなくなると オンドリはすぐにあいこのもとに もどってきました

「彼らとはなんというか <sup>かれ</sup>犬猿 <sup>けんえん</sup>いや <sup>びょうちょう</sup>猫鶏 <sup>なか</sup>の仲というか・・・

いい方々なのですが <sup>ぼく</sup>たまに僕をおいしそうに見るものでね」

あいこは オンドリの様子がおかしくて しかたがありません

「なににせよ <sup>ぼく</sup>あと一ヶ所 <sup>あんない</sup>で僕の案内はおわりです  
とっておきの場所を教えましょう」

そういうと オンドリは歩きだし しばらくすると止まりました

「この上です」

そこは とても <sup>べにいろ</sup>きれいな紅色 <sup>そ</sup>に染まった <sup>かいだん</sup>階段でした

うすい赤 こい赤 黄色かかった赤

<sup>あざ</sup>色鮮やかな木々 <sup>きぎ</sup>がトンネルのようになっています

・・・わあ！？

「僕はもう <sup>ぼく</sup>戻 <sup>もど</sup>らないといけません ではご機嫌 <sup>きげん</sup>よう おじょうさん」

そういうと オンドリはその長く続く <sup>かいだん</sup>階段を いつものように

ピョンピョンと <sup>だん</sup>2 段とばしで 上っていつてしまいました

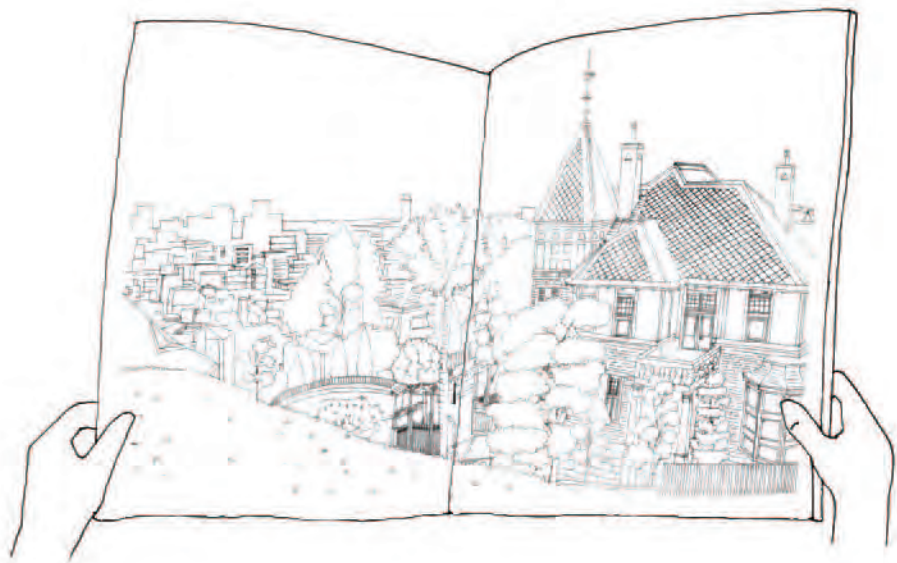
あいこも後 <sup>お</sup>を追って ゆっくり上っていきます

やっとなのおもいで <sup>かいだん</sup>あいこも階段 <sup>のぼ</sup>を上りきりました

・・・わあ！！！！







「あいこー あいこー」

・・・ はあい！ ママ！





・・・ぱたん

山と海が見える北野・山本地区。

外人さんと一緒に生活してきたこの閑静な街は

この街でしか見られない面白いもので溢れています。

異人館をめぐるのもよし、自然を感じるのもよし、

ネコについていくのもよし…。

神戸三宮から徒歩10分。

雑踏から逃れて

ゆっくり散歩してみませんか？



■非公開の洋館■

1. 列柱が印象的な洋館
  2. 双子みたいな洋館（カフェ）
  3. オーナメントが素敵な小屋
- 宗教建築■
4. ジャイナ教寺院

5. ユダヤ教シナゴーグ

6. 三森稲荷神社
  7. 北野天満神社
- 建築物■
8. 北野荘
  9. 和洋折衷住宅1

10. 和洋折衷住宅2

11. 小さなアトリエ
  12. ふくろうのいる交番
- 塀・石垣・門■
13. ぐねぐねした塀
  14. そろばんみたいな塀

15.H（ハンター）マークの塀

16. 和洋折衷な門
- こみち■
17. 歴史を感じる小径
  18. 日本的な小径
  19. 和洋折衷な小径

20. 六甲山が見える小径

- もの■
21. ポッキーみたいな電柱
  22. 車避け
  23. レトロなポスト
  24. 街灯

25. 郵便受け

- 自然■
26. 消火栓
  27. レンガ敷きの側溝
  28. 木のトンネル
  29. 塀と合体した樹

30. 7タマタの樹

- 風景■
31. 木の生えた家
  32. 坂道から見える街並1
  33. 坂道から見える街並2
  34. 風見鶏と北野の街並

神戸北野・山本地区は幕末の兵庫港開港に伴い、外国人と日本人が一緒に住むことが認められた“雑居地”に指定された。それ以降、この地は閑静な住宅街として発展を続け、今でも人々に根強い人気がある。昭和52年から放映されたNHKの連続テレビ小説で注目を集めてからは、神戸を代表する観光地としても沢山のひと々に知られている。この神戸北野・山本地区が観光地として人気があるのは、今もなお数多く洋館が残されていることが挙げられる。洋館がよく保存されているのは、神戸市の支援だけでなく、“北野・山本地区をまもり、そだてる会”を中心とした住民の方々の理解と活動に因るところが大きい。

しかしながら北野・山本地区は“北野・山本地区をまもり、そだてる会”が発足した1980年頃には存在しなかった課題をいま抱えている。特に震災以降、洋館の保存が困難な状況続くうえに、閉館する公開異人館もちらほら。北野・山本地区の顔ともいえた異人館がこのまちで成り立たなくなっているのである。

そこで住民、学生、行政、コンサルティングの方々にご協力いただき、このまちの地域資源の再評価について修士論文で取り組む事にした。その結果をもとにこの本は制作されている。

この本は北野・山本地区の紹介として観光客だけに向けたものではない。この地で暮らす方、まちづくりに関わる行政の方にも是非読んでいただきたいと思う。

最後に調査にご協力頂いた住民の方々、神戸市の方々、建築工学部門の学生の方々、指導していただいた教授、助教、ならびに関わってくださったすべての方に感謝の意を記したい。

岡崎 沙織



この物語はフィクションであり、実在の人物・団体等とは一切関係ありません。またまち歩きをされる方々におかれましては、住民の方々にご迷惑となりますので、大きな声で騒ぐなどの行為はくれぐれもなさらないでください。

All rights reserved.

No part of this publication may be reproduced, stored in retrieval system, or transmitted in any form or by any means, electronic, mechanical, photocopying, recording, or otherwise, without prior consent of the publishers.

2013/03

GENERAL DIRECTOR:  
OKAZAKI Saori

Designed by  
ABE Hirokazu  
ISSHIK Akio

OKAZAKI Saori

STORY EDITOR:  
TAKAHASHI Akira

TAKAHASHI Akira  
HAMANO Mayumi

YOSHIOKA Satoshi

SPECIAL ADVISER:  
ABE Hirokazu

Special  
Thanks  
to

北野・山本地区をまもり、そだてる会  
大阪大学 建築都市形態工学領域